

「熱性けいれん」の話

「けいれん」は突然起こることが多く、身体を硬くして手足がガタガタ震えるものです。目は上向きになり白目をむき、意識障害（呼びかけに反応せず、顔色が悪くなる）を起こしたりするので、初めてお子さんが「けいれん」を起こすとパニックを起こしてしまう母親も多い様です。

しかし、「熱性けいれん」は、生後6ヶ月から6歳くらいまでの子供100人に数人起きるもので、珍しい症状ではありません。また、「熱性けいれん」で後遺症が残ったり、死亡してしまったりすることはほとんどありません。

「熱性けいれん」の定義

「主に生後6～60か月までの乳幼児期に起こる、通常は38℃以上の発熱に伴う発作性疾患（けいれん性、非けいれん性を含む）で、髄膜炎などの中枢神経感染症、代謝異常、その他の明らかな発作の原因がみられないもので、てんかんの既往のあるものは除外されます。」

「熱性けいれん」のメカニズムはまだはっきりわかっていませんが、脳が未熟であるために起こるのではないかと考えられています。

脳は、微弱な電流を使って指令を出します。しかし、熱の刺激に弱い乳幼児は、高い熱を出すとうまく電流の調整ができなくなります。すると筋肉に勝手な指令が出てしまい、「けいれん」が生じてしまうのです。

また、「熱性けいれん」は遺伝とも関係があり、親や兄弟に「熱性けいれん」が起きたことがあれば、起こす可能性が高くなります。ただし、遺伝がなくても起こることはあります。

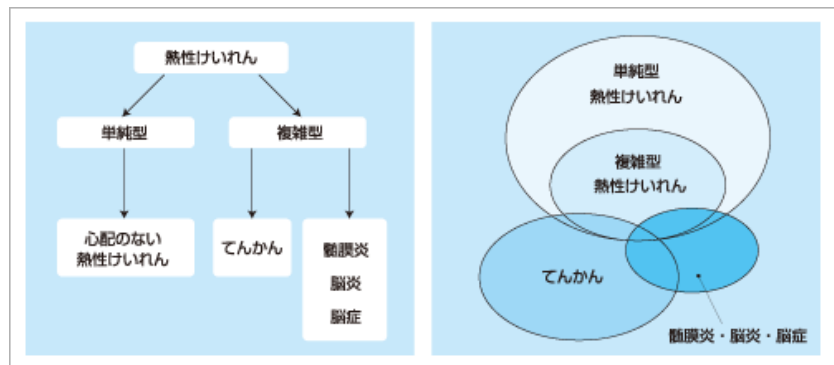
「熱性けいれん」ではなくても、何らかの刺激が脳に起こり、電流の調節ができなくなればけいれんは起こります。「熱性けいれん」との鑑別が必要になるものもあります。



「熱性けいれん」の70～80%は、心配のない＜単純型熱性けいれん＞です。（図右）

まずは慌てず、けいれんをよく「観察」することが重要です。

「熱性けいれん」は、だいたい5分以内で治まる場合が多いです。また、数分で治まるけいれんの場合は、脳に後遺症を残したり、命の危険があったりするものは少ないです。



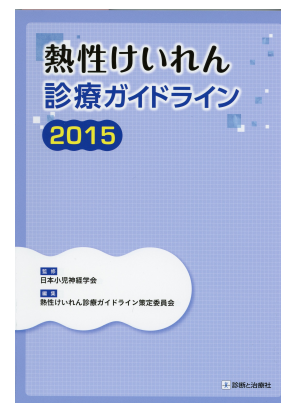
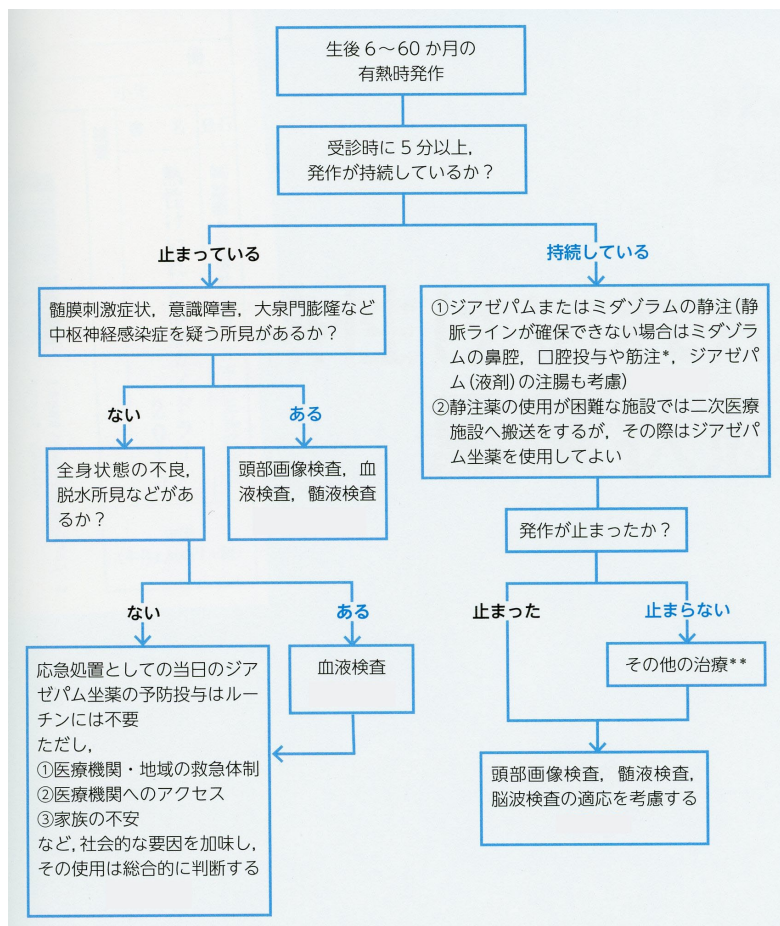
●単純型熱性けいれん

単純型熱性けいれんでは、全身のふるえ（全般発作と呼ばれます）が続くのは15分未満です。

●複雑型熱性けいれん

複雑型熱性けいれんでは、全身のふるえが15分以上続いたり、体の片側だけがふるえたり（部分発作と呼ばれます）、24時間以内に発作が2回以上起こったりします。

複雑型熱性けいれんが起こる小児は、わずかですが後年にてんかん発作を起こしやすくなります。（図上）



＜熱性けいれん 診療ガイドライン＞（図上）によれば、医療機関における「有熱時発作の初期対応」については左図のように記載されています。発作の持続時間の5分間が目安とされています。

*「ジアゼパム」「ミダゾラム」は、抗てんかん薬、抗けいれん剤です。「ジアゼパム」は静脈注射液の他に坐薬もあります。

「熱性けいれん」の発症時の対応について

- ・チアノーゼ、呼吸抑制、意識消失があっても慌てずに落ち着いて対応すること。
- ・衣服、特に首の周りをゆるくし呼吸を楽にし平らなところに寝かせること。
- ・嘔吐がみられた場合は顔を横に向け、吐いたものにより気道がつかまらないようにすること。
- ・吐物、分泌物が口の周り、鼻孔に溜まっていたら拭きとること。
- ・舌を噛まないようにと口の中にもものを入れないこと。
- ・口から薬、飲み物を与えないこと。
- ・発作の持続時間、性状（左右差、眼球偏位など）を観察し記録すること。
- ・激しく体を揺すったり、大声で呼びかけたりしないこと。

「熱性けいれん」が起こると、すぐに救急車を呼びたいくなるのは仕方ないことです。しかし、症状の多くは2、3分で治まります。救急車が到着した頃には、ケロッとしていて何事もなかったようになっていることが多いので、まずはしばらく様子を見ましょう。

ただし、救急車を呼ばなければいけない時もあります。発作が5分以上続く、また発作がおさまっても意識の戻りや顔色が悪いなどが目安です。（図上）



図は、「Benesse」、「認定病児保育スペシャリスト」、「いしやまち」ホームページ、「熱性けいれん 診療ガイドライン 2015」＜診断と治療社＞から引用しました。

この「診療所だより」や診療についての御意見・御要望などをお気軽にお寄せ下さい。
これからの参考にさせていただきます。

編集・発行： 勝山諄亮

勝山診療所

〒639-2216 奈良県御所市343番地の4（御国通り2丁目）